「大正デモクラシー」期における知識人の社会的視野 -大衆社会化論の批判的再検討-

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 雨宮, 史樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20272

２０１８年度　文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

「大正デモクラシー」期における知識人の社会的視野

－大衆社会化論の批判的再検討－

史学専攻
雨宮　史樹

1．問題意識と目的

本論文は、「大正デモクラシー」期に知識人が社会をどう認識し、その営為は、いかなるものであったのかということを描き出す。さらに、それら知識人の姿を素材として、当時の日本の社会構造が、どのような特質を有していたかを逆照射させる。具体的対象として、「前期」新人会出身者と宮崎龍介の言行に焦点をあてて、分析をおこなった。

この課題に接近するために、本稿を貫通する１つの分析軸を設定した。それが、大衆社会化論の批判的再検討という視座である。大衆社会化論は、日本近現代史に普遍理論を適用して、歴史を叙述していく。歴史学研究は常に、現在的問題に対する緊張関係を持ち、諸問題の理解や解決に役立つ取り組みが求められている。つまり、大衆社会化論の批判的再検討という視座を設けたのは、筆者が、普遍理論の適用によって日本社会を理解することは、はたして可能なのだろうか、という強い疑問を持っているためである。本稿では、日本に独特な個性という要素を重視することによって、「大正デモクラシー」期の社会を描きだしていった。

「大正デモクラシー」期を扱う本稿において、はじめに整理しておかねばならないのは、大正デモクラシー研究だろう。論者によって程度の差があるものの、同研究では、1910 年代から 20 年代の日本において、被支配諸階層に属する人々が、自立的に社会運動へ参加する動態が対象とされてきた。そこでは、当時における諸運動の興隆を把握できる一方、ある自明の前提がほとんど無批判のうちに設定されているように思われる。それは、「大正デモクラシー」という標語に明らかなように、同時代の民主主義的思潮が、社会全体を包摂していたという認識である。しかし、当時の日本は、本当に、社会全体の改造を志向するような思潮に包まれていたのだろうか。

次に、大衆社会化論について見ていきたい。同論は、日本近現代史の発展過程を、近代から現代への転形において捉えるべきだと主張する。大衆社会化論は、その転形開始期を 20 年代から 30 年代においていく。この議論は、30 年代以降を視野に入れる意思において、大正デモクラシー研究がもった限界を止揚しているようにも見える。しかし、大衆社会化論もまた、国家と地域の再組織化が進行して、社会的格差が平準化していくという普遍理論に根拠していた。特に、近年の大衆社会化論は、日本に特異な個性に注目するよりも、普遍理論に適合的な要素を重視していく傾向にある。言い換えれば、現在の大衆社会化論は、普遍的現代社会や公共社会の萌芽が、1920 年代の日本にあったという希望を語っているのである。しかし、であるのならば、なぜ同時期、新人会出身者などの知識人がおこなった社会改造運動はことごとく敗北していったのだろうか。社会再編の達成例よりも、敗北の過程にこそ、当該期における社会構造の実態が反映されているのではないだろうか。

これらの疑問を紐解く糸口は、いくつかの先行研究において指摘されている。大正デモクラシーの凋落過

程を問うた鹿野政直は、同時代の民主主義的潮流に参加できなかった膨大な民衆の姿をすくい上げた。また、メディア史研究では、有山輝雄が 20 年代の社会を大衆化や格差の平準化として議論することに強い警句を与えている。これらの研究は、同時代を大衆社会化以外の時代像で捉えるための示唆をあたえてくれる。

近年の新人会研究も、大衆社会化過程において同会出身者の活動を分析している。本稿では、「大正デモクラシー」期を大衆社会状況とは捉えない。そこにおいて問われねばならないのは、新人会出身者ははたして、戦前において一度でも大衆なるものを実体として認識しえたのであろうかということである。

2．構成及び各章の要約

第 1 章「青年知識人と「社会」の発見」では、1918 年末に東京帝国大学で結成された学生団体新人会の創立者の一人宮崎龍介の人格形成期から新人会時代及び大学卒業後の活動をおった。龍介の行動をもとに、同時期、社会に複数輩出されるようになった青年知識人の具体的姿に迫っていく。

龍介は、大陸浪人宮崎滔天の息子として生まれ、少年時代から孫文ら中国革命家と交流をもった。東京帝大に進んだ龍介は、赤松克麿、石渡春雄とともに新人会を結成した。同会は自前の労働組合を組織するなど積極的に改造運動を展開した。龍介は大学卒業後も中央法律相談所に弁護士として所属し、労働者の法的支援をおこなった。

第 2 章「青年知識人と白蓮事件」では、職業的新聞人でない新人会出身者が主導したマス・メディアキャンペーンである白蓮事件を事例として、1920 年代における青年知識人の存在形態と、彼らの自己認識に迫っていった。

新人会出身者は、『大阪朝日新聞』を利用して伊藤燁子の絶縁状を公開し、白蓮事件をおこした。この事件は、マス・メディアのセンセーションを引きおこす。白蓮事件は、新人会出身者において画期となった。新人会は活動を開始した時点から、同時代を大衆社会状況だと考え、マス・メディアを用いた宣伝という方法論に注目していた。1920 年代に入ると、青年知識人は複数のものが大学を卒業し、労働組合やマス・メディアなど、社会の多様な職業についていった。この段階に至り、彼らは自らの宣伝を新聞においておこなう可能性を手にした。それは、彼らにおいて、新人会結成当初における宣伝への注目という方法論の構想段階から、実際にマス・メディアを操作していく実践段階へと、改造運動における跳躍をもたらした。

しかし、同時にこの宣伝への没入は、青年知識人における陥穽でもあった。情報操作をも含むマス・メディア利用は、宣伝に依存することによって、強い啓蒙性を帯びることとなる。宣伝への依存度の増加は、啓蒙的性格の全面化につながり、それは往々にして上からの統制という志向に行き着くことになる。つまり、白蓮事件は、その後、巨大な社会的統制装置を夢見て、新人会出身者が賛同した、近衛新体制構想に連なる思考様式の勃興地点でもあった。

第 3 章「社会的上層と白蓮事件」では、新聞社の報道記事を主たる分析対象として、白蓮事件がなぜ、一回性の出来事で終わってしまったのかということについて考察した。

新人会出身者は、女性解放というシングルイシューを設定して白蓮事件を展開した。しかし、事件は各新聞社の報道を経る中でベクトルが変更され、批判の矛先は華族と、それを監督する宮内省へ向けられた。白蓮事件は、計画者の意図とまったくことなる次元で、解釈されてしまった。つまり、1920 年代初頭の日本では、大衆煽動的宣伝が確たる効果を示さないのだった。

第 4 章「大衆社会という幻影」では、「前期」新人会と宮崎龍介の朝鮮や中国に対する視線をもとにして、「大正デモクラシー」期における知識人の社会認識の振れ幅を描きだす。この課題に接近するために、大衆社会化論の批判的再検討という既述の分析軸とともに、新たに日本人の東アジア観という分析軸を導入していく。

第一次世界大戦後、それまで帝国主義政策を採り東アジアに侵出していった日本は、その闘争の場とされた国々からの強い批判に直面した。新人会出身者は、国内の改造運動をおこなうとともに、日本の帝国主義政策の抑圧下にある人々に対しても共感を示していく。

新人会出身者は、自身の運動を達成するためには、広範な人々から支持を得ることが必要であることを理解していた。同時代を大衆社会状況だと考える彼らは、機関紙を発行するなど宣伝活動を重視する。しかし、彼らが期待をかけた宣伝は、社会に対して影響を与えていないことが判明してきた。新人会出身者は、1920年代を通じて恒常的な支持基盤の喪失状態におかれる。

ただ、同時代、彼らは広域な事象にも眼をひらいていった。新人会の三・一運動や五・四運動支持は当時において最も急進的な内容をもち、一つの時代的到達点であった。

しかし、彼らの東アジア観にはその端緒から、対話と優越というアジア主義的アポリアが胚胎されていた。20年代後半、新人会出身者の社会的位置が変化し、彼らを拘束していた焦燥感が頂点に達する。その時、彼らが胚胎していたアポリアが発露した。新人会出身者は、国内における支持基盤を構築するために、日本のアジアにおける優越性を強調し、他方でそれ以前までかろうじて保持していた同地域への共感を切り捨てたのだった。

第5章「満州事変と「大衆」の発見」では、宮崎龍介の言行をおいながら、新人会出身の知識人が、同事変からアジア・太平洋戦争までの期間に、いかなる社会認識を有していたかを明らかにする。

龍介は、満州事変後、排外主義を伴いながら事変に熱狂する人々を見て「大衆」を発見した。彼は、この「大衆」からの支持を得るために、中国に対して強情な発言を繰り返す。つまり、新人会出身者は、日本が抱える矛盾や不平のはけ口を、外国の脅威に転化したのだった。1920年代から40年代にかけて、龍介らがおこなった行為は、社会主義の階級闘争理論を国家間闘争の論理にすり替えるものだった。彼らは、戦争という非日常を用いて国内社会の再編成を目論んでいく。

しかし、戦前の日本において諸階層間の懸隔が平準化したような大衆社会は、ついに成立することはなかった。同時期の社会には、常に複数の階層間にはしる亀裂が存在していた。総力戦体制をもってしても包摂できない民衆世界が分厚く存在したのである。龍介らが賛同した、近衛新党運動や新体制運動の無残な崩壊及びアジア・太平洋戦争の敗戦は、彼らが「大衆」を発見したと思いつつも、一度たりともその存在を手にとることができなかったことを物語っている。

3．結論

本稿で明らかになったのは、同時代を大衆社会状況だと考える知識人が、どんなに真剣にそして積極的に行動しても社会的に孤立していく姿である。「大正デモクラシー」期に活動を開始した新人会出身者がもった最大の問題は、彼らが同時代を大衆社会だと観念したことにある。しかし、彼らの主観とは裏腹に、同時代は大衆社会状況を形成していなかった。恒常的焦燥感につきまとわれながら、新人会出身者が歩んだ道のりは、最終的に上からの社会統制と戦争協力にいきつくことになった。

大衆社会化論が評価するのは普遍理論に適合的な事象である。「大正デモクラシー」期を、大衆社会化過程だと見る研究者もあるいは、新人会出身者と同じ眼差しで世界を眺めてしまってはいないだろうか。